

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

27 「はじめの乳」のはじめとは

第二十七日め（四月十一日）

午前三時、戸外で猛烈な風音がする。

昨夕南南西から吹いていた風はいつのまにか、北西の風にかわっている。風向きが西から北へとふれていく。南のほうを低気圧が通過していくらしい。アンテナがたおれる。台風のような風である。

午前三時半、ヒツジの群れを石垣へレムのなかへととじこめた。たくさんのヒツジをかこうのはこれが二度め。吹雪になることをおそれて、とりあえず群れをかこう。

午前六時。雪はふらない。群れを石垣から外へだした。

午前七時で気温は五度。それほどさむくはないが、北西風がとてもつめたい。風はさらに徐々に東へとふれはじめている。

けさは、哺乳補助に時間を要した。あの吹雪の夜がそうだったように、石垣のなかに群れ本隊をいれたために、暗室が窮屈になり、母子のペアに混乱が生じて、子嫌い現象が多発したためである。

エルデニチメグ姉さんは、自分のヒツジ・ヤギたちのチェックをすませると、トイグの作業にとりかかった。うしなわれた母子のきずなをとりもどすために、母ヒツジに歌をうたおうというのである。

まず、暗室の中央部におかれた柳条製の囲いのなかに、当該の母子ヒツジをペアにしている。サル



柳条製の囲いのなかでうたう介入

ヤナギを編んでつくられた囲いは、本来、開閉でききるが、彼女はヒツジをもちあげて上からつっこんだ。つぎに、自分がこの囲いのなかにはいる。一畳弱の囲いのなかに、彼女とヒツジの親子がはいりこんだ。外からみると、まるでお風呂にでもつかっているようである。

エルデニチメグは、小声でぶつぶついつている。蚊のなくような声で、トイグ、トイグと連発する。音量は小さく、旋律性もよわい。それでも、これは歌である。母ヒツジにうたってきかせる「子とらせ歌」である。こうしてトイグ、トイグとうたってきかせると、母らしくふるまうようになるのだ、という。まわりが騒々しいと、ヒツジも気が散るので、こうして囲いのなかでおこなうのだ、という。

トイグの歌をきかされているのは、四月五日に双子出産だと判定された母ヒツジである。ほかに該当するヒツジがないために、エルデニチメグのヒツジの双子出産だったとされたもの。母ヒツジが、実の子であると匂いでみとめたから、その



養子縁組のためのうたう介入

ような判定がくだされたのだった。しかし、昨夜の混乱で、せっかくの実母実子の認知もこわれてしまったらしい。これまでは、乳が不足気味なので、実母以外からも寄乳をおこなっていたから、子ヒツジのほうが浮気で実母ヒツジから離散する傾向があったのかもしれない。うしなわれた実母実子の認知関係は、しばらくペアリングすることで修復された。

午前十時ころになると、砂がまいはじめた。空が赤い。

サラントヤーは、黒鼻オンチンの養子縁組にとりくむ。彼女は、バケツに水をくんで、西の暗室ベンにはいった。そこには、養母候補のヒツジが柱にしばりつけられていた。昨夜の混乱のとき、子ヒツジからにげないように縄でしばりつけられたらしい。

サラントヤーは、まず養母ヒツジに水をのませた。つぎに、脂肪尾をめくりあげ、おしりについている糞や尿のしみを、子ヒツジのからだにぬりつける。実子だと思わせるために、匂いをうつす

のである。そして、子ヒツジを養母の下腹部にもぐりこませて乳をすわせた。こうして哺乳を補助するあいだずっと、彼女はうたう。

「トイグ、トイグ、トイグ……」

それは、この地方につたわる長唄風民謡のゆったりとした調べであった。歌詞はなく、ただひたすらトイグというよびかけを、民謡の調べにのせる。一小節がおわるごとに、

「トゥルルルル……」

と、巻き舌をつかう。これは、母ヒツジをよぶときの音でもあった。

母ヒツジの匂いをうつし、母ヒツジに「トイグ、トイグ」というよびかけをうたう方法。それは、まさしくモンゴルの伝統的な「子とらせ方法」であった。この方法は、単に実母子の認知を修復するばかりでなく、このように養子縁組でも、もちいることがわかる。

モンゴルの牧民たちにとって、養子縁組は特別なことではなく、母子紐帯の強化と連続している。自然な群れのなかに発見することができる、母子のきずなというものを大切に考え、これをうながし、それがきずつけば修復し、疑似的母子関係さえも簡単に創作するのである。

ここに、搾乳よりも大切な、本来の、乳の用途がある。これまでみてきたような、母子のきずなをめぐる多様な介入は、すべて子育てのためにほかならない。搾乳以前の、乳をめぐるモンゴルの生態である。

養母ヒツジがモグモグと口をうごかしている。それをみて、サラントヤーは、

「もうそろそろだわ」

といった。母ヒツジが口をうごかしはじめたら、その気になった証拠であるらしい。そして彼女は、母ヒツジをしばりつけていた縄をほどいた。

午前十一時。気温は零度までさがっている。風はさらにつよくなり、さらに東へふれて、ほとんど真北の風になってる。雪がふりはじめる。これまで母子群のなかに入れられていた足のわるいヒツジが、母子群の放牧道中に死んだ。

午後三時すぎ、吹雪がやみ、突然、晴れわたる。気温はまたたくまに十度に上昇している。しかし、あいかわらず風はつよい。砂がまいあがる。目がいたむ。

この悪天候のなかで、本家のウシが出産した。ゴンジとよばれている。かぞえて四歳になるメスウシのことである。初産であった。赤毛のウシで、すこし体毛がぬけおちており、あまり健康そうではない。母子ともに、丸い石垣フレーのなかに収容されている。

ゴンジが出産して二時間ほどたったころ、母モージが乳をしほりにいこうと、エルデニチメグ姉をうながした。初産だというのに、その初乳までをも人が横取りしてしまうのであろうか。本来の牛乳の用途は、羊乳と同様に、子畜すなわち子ウシのためであるはずなのに。

丸い石垣フレーに到着すると、当該のメスウシをモージ母がおさえるようにし、エルデニチメグがうしろ足二本を縄でしばった。縄でしばる様子は、ほかのウシを搾乳するときとまったく同様である。ただし、子ウシにあらかじめ吸乳させる催乳はなかった。モージがメスウシをなせることを催乳とよんでいた。二人はなごやかに話をはずませながら、搾乳する。

「しほっておかないと、子ウシが下痢をしたりするんだよ」

と、母モージがいうと、エルデニチメグ姉が、

「これからずっとたくさん乳がでるようになって、最初にしほるのよ」
といい、さらに母モージは、

「最初の乳をちゃんとしほっておくと、搾乳のときにあばれない、おとなしい性格になる」

という。すると、エルデニチメグが、

「石をおいてしぼると、おとなしくなるっていうわよ。うちじゃいつも養母がそうしてるもの」

と応じる。すると、母モージがそばにころがっている石ころをひろって、メスウシの尻にのせながら、「そうそう。こんなぐあいにね」といった。

なるほど、初乳をしぼる効果は多角的に解説されている。子ウシが下痢をしないため、乳量をふやすため、搾乳になれさせるため。このうち、第一の点がより実質的效果であるのにくらべると、第二や第三の点は、人びとの期待効果にとどまる。まさに、石ころをおくというおまじないにも反映されているように、呪術的である。初産メスの初乳をしぼるのは、いわばおまじないのように思われる。

モージ母はまた、乳の利用法の側面から、初乳をその他の乳から区別する。

「初乳は、ふつうの乳となかみがちがう。だから、一緒にしない。初乳は、他の乳とは別にして料理をつくる」

だからこそ、こうして一頭だけいま搾乳しているのである。

この料理の解説のときの「初乳」と、さきほど石ころをおいたときの「初乳」とは、別の語がつかわれていた。ふつうのミルクと性質が異なるというときの初乳は「オーラガ」という。いっぽうの初乳は「ジルベ」という。辞書には、ともに初乳とあり、丁寧な解説によれば、出産後の日数によって区別するのだ、ともいう。しかし、ここでは、現実にはおなじものをさしている。出産後の日数によって区別すちがうのは、話の文脈である。初産であることが問題になっているとき、彼女たちは「ジルベ」という語をつかう。そのとき、「はじめの乳」のはじめとは、初産をさしているのであった。

一般に、初乳といえは出産のたびに出るものである。個体にとって、出産の都度「初乳」がありうる。

しかし、最初の初乳は、ただ一度しか存在しない。すなわち、個体にとっての最初の乳とは、まさに初産のときの初乳なのである。オーラガは出産ごとの初乳であり、シルベは一生の初乳なのである。このような「個体にとっての初乳」という発想があることは、モンゴルの牧畜を理解するうえで重要な意味をもっているように思われる。

搾乳に関して、モンゴルでは「初乳のまつり」があることが知られてきた。とりわけウマの初乳祭が有名である。現在では、毎年ウマの搾乳シーズンを開始するにあたって実施する儀式として理解されている。九つの穴のあいた大匙で、ウマの乳を天にふりそそぎ、祈禱あるいは祈願をおこなうものである。これは、複数のメスの搾乳開始を同時に祝すものであり、実際には、個体それぞれの初乳祭ではないが、初乳祭として理解されてきた。しかしながら、初乳にもうひとつの意味があることを考えると、個体それぞれの初乳祭ではなく、ある特定の個体たちすなわちその年に初産した個体たちこそが初乳祭の本来の対象ではなかったか、と思われる。

ウマの初乳祭は、しばしば「ウルス・ガルガハ・ヨス」とよばれる。直訳すると、「種（複数形）をだす儀式」となる。搾乳のことを「種をだす」と表現するのは、ちょっと奇妙である。種には、子孫あるいは精子などの意味もふくまれているが、ほんとうに、乳が種・子孫・精子の表象としてアナロジカルに理解されているのだろうか。

ウマの初乳祭を、個体にとっての初乳の祝いすなわち初産の儀式として理解すると、初乳祭が「種をだす儀式」とよばれることも、不思議ではなくなる。初産の儀式とは、個体が成熟し、再生産を開始したことを祝すものであろう。子孫をふやしていくことを祈願し、そのメス個体をつうじて、群れ全体を繁殖させることを祈念するものであろう。だとすれば、それはまさに「種（子々孫々）をだす儀式」とよぶにふさわしい。

ウシについても「ウレス・ガルガハ・ヨス」がある。この儀式の祝詞をみると、はっきりと初産であることが記されている。しかも、「メスウシ」の儀式ではなく、「ウシ」の儀式であると明示されている。牧畜作業暦における搾乳開始の儀式ではなく、再生産の開始をいわうことが、本来の目的であったと推測される。

「種をだす」儀礼的行為に対して、じつは「種をとる」儀礼的行為が存在している。去勢儀礼である。去勢儀礼では、再生産の可能性が除去される。いわば、精子が奪取されるのであって、種をとるという表現は、きわめて直截的で、理解しやすいであろう。

前者の「種をだす」場合の「種」が複数であるのに対して、後者の「種をとる」場合は単数である。これらの対比的な表現からみると、「種」という表現は「精子の具象」というよりも「子孫の表象」と了解したほうが適切であろう。メスにとって「子々孫々をだす」と、オスにとって「子孫をとる」とことが、ちょうど対句的に表現されているのである。

牧畜の成立を可能にした二大技術が、搾乳と去勢である。この二つが、モンゴルでは、儀礼的行為として対になってあらわれる。しかも、そのうちの搾乳は、乳そのものをめめるものではなく、再生産すなわち繁殖そのものをめめるものとして儀礼化されている。繁殖の儀式であればこそ、去勢と対にすることができるのである。

モンゴルの遊牧の本質は、搾乳よりも繁殖そのものにあるのではないだろうか。畜産物で表現するならば、乳よりも肉を志向する牧畜であるといえる。こうした志向は、遊牧の狩猟起源説ともより密接に整合するであろう。さらに、本来の乳の用途である養育を念入りにおこなっていることの意味もまた、より深く理解できるであろう。

もちろん、現在のモンゴル牧民の生活にとって、乳のもつ意味は大きい。搾乳は、もっとも重要で、

必須の生活技術である。しかし、現在の生活上の重要度は、かならずしも起源などを考察する場合の重要度に直結するとはかぎらない。搾乳シーズン開始の慶事が、本来まさしく再生産開始の儀礼であったならば、乳の意義もまたそのまま肉の意味に転換しうることになる。

家畜を殺さず、乳を利子として利用するのが牧畜であるならば、再生産にかかわらない家畜を利子とみだてて、これを多角的に利用し、かつ殺すのが遊牧であり、狩猟に連続する生業なのではないだろうか。

初産のおまじないをみているうちに、「はじめの乳」のはじめから、遊牧のはじめまで連想して、いつのまにか日がくれた。